
超中 2 的小説@裏組織+邪気眼

平賀 秦色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超中2的小説@裏組織+邪気眼

【Nコード】

N7125Y

【作者名】

平賀 秦色

【あらすじ】

リアル中2の時に書いた、リアル中2病な小説。

平凡な高校生、ロウ襖月（笑）が突然、裏の組織（笑）に入るとい
うお話。

ちりばめられた服線、どんどんと人間離れしていくバトル、つてい
うか途中人間やめちゃった主人公。悶えるような恥ずかしさと、中
2病独特のわくわく感をあなたにお届けします！

「シヨ カーこそヒーローだ！」 「魔王が主人公になればいいのに・
・」
そんなあなたにお勧めです。

ロウ襖月、道に迷う（前書き）

注意

この話はリアル中2の時に書いたものを、加筆修正してあるもの、悶えるような恥ずかしさです。

耐性のない方は、ご注意ください。

内容はリアル高校生が、急に裏の組織の仲間入りをし、いろいろな裏社会の人と出会う話です。

いろいろな、ちぐはぐで急な展開に、突っ込み入れていただきながら読んでいただけるとうれしいです。

では、どうぞ

ロウ襖月、道に迷う

「退屈、だなあ……」

机に向かい、ペンを回す。

少し猫背ぎみに、もたれかかる様に教科書に目を通すが、半分上の空である。

「襖月！誰の授業が退屈だつて、おい！」

国語の先生だったが、耳は大変よろしかったらしい。

ご丁寧に前から3列目、右から4番目の席にまで来て、教科書アタックをくりだす。

授業再開。

クリーム色の壁紙や、緑さえも白く見えるほど埋め尽くされた黒板、数ある掲示物、授業終了まで程遠い針を指した時計。

眠気を誘つと同時に、彼にとっては目に映るもの感じるもの全てが退屈だった。

放課後。

ロウ襖月は、いつもどおりふらふらと帰路につく。

クラスメイトらは、そんな彼を「おう」と見送るだけで一緒に帰るでもなかった。

ロウという彼も「じゃ、」と言ってそれだけ。

仲が悪いわけでもなく、たいして、いいわけでもない。

浮いてるわけでもなく、ましてや、目立つわけでもない。

暗い、こともなく、明るい、こともなくない。

中間の詰め合わせ。

不気味ささえ漂うほど平凡。

いわゆる世間での、空気みたいな人だった。

ただ、ルックス的には奇妙な名前であるからして、金髪碧眼と、整った顔立ちであった。

そのほかにも、学業、体育のほうも優秀でモテないはずがなかった。だが、脇役のような、補佐のような彼の存在を女子たちは気にとめることもなく、

「あー、いたっけ？それよりさあ〜！！3組の高柳君、テレビ超かっこよくなかった！！？」

と、この学園にいるイケメンアイドル達のほうに目がいくようになっていた。

ロウは、それはそれで、少し安心しており、陰ひなたに暮らしていた。

「あー、雨……」

微妙に人のいない裏路地であった。

ビルとビルの間から灰色の空が見える。

家も、ビルも、皆そっぽを向いていて、なんか一人取り残された気分だ。

灰色の壁だけが、視界に広がる。

彼には、退屈しのぎにふらふらと当てのない下校をする癖があり、気がつくときと変な所にいることが多かった。

そのため、雨が降ってきてても、走って家に帰ることが出来ず、仕方ないため、鞆で雨をしのぎながら、家があるであろう方向を指し、

少し小走りで帰ることにした。

いくら進んでも、いくら進んでも、ビルの間を抜けることはできなかった。

延々と、迷路のようにビルの壁がロウを覆う。

いつもなら、もう見知った場所に出てもいいはずだった。

「迷ったのか……？」と本気で悩みながら、あてもない道を大股で歩いた。

空はさらに曇り、ビルと一色の一面灰色の世界。

「気味悪りい・・・」

濁った空は、緑を少し含んでるような気さえする。

路地は次第に細くなり、灰色が、黒に変わる。

その先は、ちようど行き止まりになっていた。

ロウ襖月、道に迷う（後書き）

読んでいただいておりますがとうございました！

すっごく短いですが、まだまだ続きます！！

アイツやら、コイツも出てきてないんでww

次はもっと痛々しい内容&長文でお送りいたします。

テスト投稿です。

っていうか、原文が中2過ぎて精根尽き果てました……

加筆修正も行っております。

そのまま出すと、やばいぐらいひどいのでww

では！また近いうちに！

ここまで読んでくれたあなたが大好きちゅー？

はい、中2病治ってないですね。

『白騎士』と老人（前書き）

あらずじ 普通な高校生っていう設定のはずの金髪碧眼のロウ襖月とか言う奴が、友達もいないため悲しく一人彷徨っていたら、迷子になっちゃって、雨降ったし、どうしよう泣きみたいな感じ。

『白騎士』と老人

行き止まり。ビルとビルの狭間。

そこには埋め込まれたように古めかしい茶色の扉・・・茶色の扉をもった建物がたたずんでいた。

まるで無理やり増築したような違和感。

しかし、ビルの狭間であるということを除けば、その建物は喫茶店のような雰囲気だ。

雨がひどくなってきた。しばらくはポーッと佇んでいたロウだが、雨をしのぐすべがないのでとりあえずその建物軒下で雨宿りすることにした。

もともと長めの髪。特に前髪がべつとりと張り付いて気持ち悪い。視界が悪いので少し分けてその建物を見渡すことにした。

「OPEN」

建物の雰囲気上、店であるだろうとは思っていたが、これで確信が持てた。

何屋なのだろうか？

扉の隣には大きな窓が備え付けられているが、電気がついていないようでも中の様子をうかがい知れない。

店である以上、このま前でつつ立てるのも申し訳ないので中に入ってみることにした。

カラン

鈴のような音。

この音一つでも芸術になりそうな、雰囲気を伴った音。陰気臭い喫茶店のような外観、やはりというべきか、中には客は全くいなかった。

茶色の床はもはや黒に近く、ギシギシと音を立てる。薄暗く、異国にタイプスリップしたよう。

おもちゃ箱に閉じ込められた人形のような気分。アンティーク。

6つほど並べられた大きな机は、木製のものばかり。思っていたよりは広がったようだ。

そして、その机の上には……

「銃………?」

銃だった。小さなものばかりだったが、まぎれもなくそこかしこに銃が並んでいる。

「本、物………?」

ゆっくりと手を触れてみる。

ひんやりとした銃身。

細部までこだわった作り。

ずっしりとくる重さ。

「まるで、本物………」

「まるでじゃあねえさ。本当に本物さ……」

ふっと顔をあげると、奥の扉から老人が出てきた。

白髪交じりの髪や、ローブのような服を着ているため少し老いて見えるが、年齢的には老人というほど老いてもいないようだ。

「なんで・・・犯罪じゃないか・・・」

老人はニタリとして、キセルに火をつける。

ふー、と息を吐いて言った。

「そうだよ、犯罪さ。でも、心配はあいらない。奴らは手を出せな
いはずさ・・・」

「奴ら？警察のことか？」

「ぶ、ぶはははははははははははははははあはは！警察？久々に聞いたわ
！！ぶくく、はははははははははは！！！！」

「兄ちゃん、警察なんて当てになってないんだぜ？本当にあんたら
守ってるのは、『白騎士』。ちゃーんと覚えとくんだぞ。自分のた
ちのこと守ってる相手のこと、知らないとはかわいそうすぎるから
なあー！！」

『白騎士』？守る？銃・・・

「なあーんにもしらねえんだな。ははっ、そりゃそうさ。それも含
めて『白騎士』の仕事だからなあ。裏の奴らも表ざたにはしたがら
ねえし、知らなくて当然だが・・・いや、こつち側にいすぎて感覚
にぶつちまってるのか？ぎやくに笑えてくるわ・・・！！」

「あんた、頭大丈夫なのか・・・とりあえず、警察に・・・！！」

ロウは小走りに出口に向かった。

「やめときなよ、兄ちゃん。兄ちゃん殺されちまうぜ？」

「どうせ脅しだろ？こんなこと・・・許されるわけが・・・！！」

こんなこと、許されるわけが？

本当にそう思っているのだろうか。

ロウの足が止まった。

「お！兄ちゃん、おじけずいたか？ははは！」

「じいさん、その『白騎士』の話し、詳しく聞きたいな」

そうだ。この『白騎士』が老人のでっち上げなら、でっち上げで、今までの日常が元通り。どうせこの銃も偽物だろっていう話。たとえ銃が本物でも、そいう非日常があったんだなっていう話。もし、本当なら……本当なら……

『白騎士』と老人（後書き）

はい、これでも短いっすねw精根尽き果てました。

最初は、警察の件はなくて、いきなり白騎士から入って行って置いてけぼり状態でしたが、逆にその方が中2的で痛々しくてよかったのかもしれないけど、恥ずかしすぎるのでやめました。今回は中2っぽくないはず！

これで中2とか言われたら私デフォルメ中2だよ……

最初はロウ君、ケータイで警察に電話入れようとする流れだったけど（現代っ子！）、この状況でそれやるとバカだなあって思って没。他にも面白い話あったけど、没。

あとがきが長いのも、中2仕様ですw

ここまで読んでくれてありがチュー？

キモクてすみません。

賭け（前書き）

あらずじ 目の前になぜかビルの狭間の喫茶店っぽい店。雨降ってるしあやしーけどはいるーみたいな感じで入ったら、銃がいつぱい！わお！そしたら店主が出てきてこんにちは！ペラペラと『白騎士』やらつんたらかんたらこっちが聞いていないのに話しまして、怪しーけどちよつと気になるし？様子うかがってみようって感じで鎌かけてみる？みたいな感じでどーぞ。

賭け

じいさん、その『白騎士』の話し、詳しく聞きたいな」

「はあ？『白騎士』の話を知りたい？」

薄暗い古めかしい部屋。窓の外では雨が激しく、周囲の雰囲気さをさらに重くする。

「さつきも言っただろ？あんまり表ざたにはしたがらねえって。『白騎士』に限らず、裏の奴らだってそうだって。どっか意味か、分かるだろ？」

ただじゃすまない、ということだろう。最悪殺されるかもしれない。だが、ロウは恐怖を感じるよりも先に、計り知れない好奇心が押し寄せてくることを感じていた。

ずっと前から欲しかったもの。ずっと待ち望んで、やっと目の前に現れた。それを、ここで易々と手放すことが出来るのだろうか？

「もう、『白騎士』の存在知ってしまったんだ。その時点で、じいさん、責任とってくれよ」

老人は、はあーと、深いため息をついた。

「そうだなあ。そうりゃそうか。一般人入ってくることなんて今まで無かったから、ついつつ喋っちまったよ。そうだよなあ、責任取らないとなあ」

「分かってくれたの……」「じゃあ、責任とって、兄ちゃんの記

憶消すことにするよ」

老人は茶色のローブの中から、すっと腕を持ち上げた。その腕は、手首から上にかけて、うっすらと光っていた。

「何……」

「俺さ、裏の奴らばかり相手にしてきたからさ、表の奴らみたいになんわりとは出来ないが……責任取らないとなあ？」

周囲の空気が、何らかの「力」によってがらりと変わる。

どうして今まで気付かなかったんだろ。この老人に対する違和感を。

ここにきて、ようやく恐怖をかみしめることが出来た。

「これ、俺あんまり得意じゃねえんだよな……最悪頭ぶっ壊れ……いや、なんでもない。ここで殺そうとしないで、記憶消そうとするにとどめてるだけ、ありがたいと思ってくれよ？」

恐怖。

全身からほとばしるような汗。

それはこの老人に対するものと、死ぬかもしれないという恐怖。

普通なら。

口ウももちろんそれは感じている。

それとはまた別に。

いま、ここで知ったこと。掴みかけたわずかな何か。

具体的な全貌をちらつかせあとに、それが幻想に終わってしまうのが、幻想すら残らないというのが、ロウには何よりもの恐怖だった。

「待つてくれよ・・・」

「いや、大丈夫だ、うまくやるから。俺、以外とやればできるんだぜ？」

「誰にも言わないっていうのはどうだ？別に記憶消さなくても・・・」

「誰にも言わないからいいんじゃないんだよ。知ってるって時点で問題なんだ。この意味、分かるか？」

「分かった。誰にも言わないし、何もしない。お願いだよ・・・やめてくれ・・・！」

「何もしない。なんて、兄ちゃんに出来るのか？兄ちゃんだけじゃない。誰にも出来ない。何もしないってことは、死ぬってことなんだぜ？」

何もしないにもいろいろな尺度がある。

まず先に浮かぶ、”何もしない”。

警察に通報。

こんなことは当たり前。

文章に書きとめる。

これは表立って『白騎士』や『裏の組織』について書かないにしても、『白騎士』を知ってしまったことによる予備知識があれば、俺の書いた全ての文章が、『白騎士』や『裏の組織』を証明するものとなってしまふ。

道を歩く。

今までなんでもなかった俺の散歩。これが知ってしまったことよって、それらを暗示させるものとなる。

俺の行動が、俺の見てる世界が、全ての証明になるんだ。

死ぬってこと。確かにそうだ。何もしない……特に俺には、できそうにないな。

「今知ったこと、忘れるぐらいなら、俺は、死んだ方がましだ。」

「はあ？兄ちゃん、変わってるなあ……生きていたら、また知る機会があるかもしれないんだぜ？あきらめちゃあだめだ。」

「偶然なんだろう？俺が今まで見てきた世界には『白騎士』やら、『裏の組織』をおわせる痕跡がなかった。不気味なほどに。俺の感受性が鈍ってるって言われちゃまったらおしまいだ。凡人の俺が、またここにたどりつくことが出来るのか？無理だ。だから俺は……」

ロウは、手元にあつた、銃をつかんだ。

「それで、俺と闘おう、ってか？」

「いや、違う。」

ロウは銃口を、自分に向けた。

「自分から、可能性を捨てちゃうのかい？何兆分の1ぐらいの確率で、また知ることだってできるじゃねえか！兄ちゃんがここにたどりついて、俺から話を聞いたって次点で、不可能じゃねえって証明できただろ？それなのに……最近の若いもんときたら……」

「それも少し違うな」

「何……？」

賭け（後書き）

てな感じで精根尽き果て・・・てはないのだ！

今回はのりのりで書いてたwwいい感じで区切って煽ろう作戦w

中2で恥ずかしい感じにする予定が、自分の書きたいこと書きまくって、まじめな感じになってしまった・・・orz

ネタにしようとするつもりが！！

いや、根本は中2だがw

若さゆえ、未熟なところもありますが、よろしくお願いします！

この変なあとがきも飛ばさず読んでくれたあなた！（読んでくれる人いるのかしらw）大好き？ありがちゅー？

キモイですねwでもお！精一杯のラブコール　だからキモイ
んじゃ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7125y/>

超中2的小説@裏組織+邪気眼

2011年11月22日02時56分発行